

# 肝炎からの 肝発癌をめぐる話題

## ～ C型肝炎SVR後の肝発癌ポテンシャル～

京都大学大学院医学研究科消化器内科 丸澤 宏之

### KEY WORDS

- 肝癌
- C型肝炎
- 遺伝子異常

### はじめに

癌の発生にはさまざまな要因が関与しているが、なかでも慢性炎症は発癌の主要な背景因子であることが知られている。事実、C型肝炎ウイルス (hepatitis C virus : HCV) 感染による慢性肝炎からの肝発癌は年率0.5～1%，肝硬変からの肝発癌は年率5～8%にも達することが知られている<sup>1)</sup>。また、早期発見がなされた肝細胞癌を肝切除術やラジオ波熱凝固療法により根治的に治療しても、残存する肝臓に新たに肝細胞癌が発生する、いわゆる多中心性発癌は日常臨床でしばしば経験するところであり、慢性的に炎症にさらされた肝臓は発癌のポテンシャルがきわめて高いことがわかる。一方、HCV感染に対してインターフェロン治療を行うことで、肝細胞癌の発生率が有意に低下することが広く知られているが、インターフェロン治療によるHCVのウイルス排除 (sustained

virological response ; SVR) 後にもかかわらず肝細胞癌の発生をみることは、まれならず経験される。これは、ウイルス駆除により炎症の原因を排除したとしても、長期にわたる慢性炎症の罹患期間にすでに肝臓には発癌につながる不可逆的な変化が潜在・蓄積していた可能性を示唆している。本稿では、長年持続した慢性炎症 (慢性肝炎) により肝臓に蓄積された発癌ポテンシャルについて概説する。

### I. 肝炎ウイルス感染と肝発癌

肝炎ウイルスの持続感染は、わが国における肝癌発生の最も重要なリスクファクターである。HCV感染による肝硬変からの肝癌の発生は年率8%ときわめて高いことが知られているが、肝硬変に至っていない慢性肝炎からでも線維化のステージがF3で5%，F2で1～2%，F1であっても年率0.5%

Carcinogenic potential after the clearance of HCV infection.  
Hiroyuki Marusawa (講師)